

雜 錄

滯 歐 座 談

教授 醫學博士 鳥 瀨 隆 三

私が今度歐洲に参りましたのは第8回國際外科學會に日本の會員を代表して出席すると云ふ事が公用で有りまして、其の他にも一ツ、私用と言へば私用ですが教室の仕事を経て居たのであります。

先づ國際外科學會なるものの如何なるものであるかを説明致して置き度いと思ひますが國際云々と名が附いて居りましてその内容は眞の意味の國際的なものではなくて、此の學會は獨逸、奧太利、土耳其等の諸國を加へて居ないのであります。即ち歐洲大戰で佛蘭西に反對した諸國を總て除外して、本部を白耳義のブラツセルに置いて居る學會であります。そして毎學會を、獨逸を中心に取り巻いて居る國々で順番に開き、獨逸を大いに嫌がらせて來たものであります。

前學會から、日本も此の國際外科學會に入會する様にと本部から勧誘がありまして、その際三宅九大教授から「如何にしたものであらう」との相談が私にありましたから、私は「若し此の際獨逸をも入會させるならば日本も入會し様と返事しては如何」と云ふ説を出しましたが、結局「それは少し不穩當だから、先づ日本が入會して然る後に獨逸を入會させる様に勧め様」と云ふ事に決着した様ないきさつがあるのであります。

然し日本の取つた此の態度が、獨逸の外科醫を喜ばせたことは非常なもので、對日本人への感情を随分と和げたのであります。戦後獨逸人が日本人に對して抱いた感情は可成りに悪かつたもので、その頃教室の伊藤隆氏の業績を獨逸外科學會雜誌に發表し様と思つて原稿を送つてやりましたら「若し貴方が獨逸を國際外科學會から除外する事が悪いと思つて居ると云ふ證文を書いて寄越すなら、此の原稿を受け付けてやらう。」との返事を貰つて其の言の通り證文を書き、論文を載せて貰つた事がありました位です。(Deutsche Zeitschr. f. Chir. Bd 185, 1924, S. 124 参照) 然し獨逸側では1929年獨逸外科學會長 Küttner の如き獨逸は斷じて、そんな外科學會に入會するものでは無い、と迄云つて居る次第であります。(Küttner が國際外科學會へ與へた意氣壯烈な書面はいつか諸君へ御披露致します。)

以上で國際外科學會なるものの正態は御解りになりましたらうが、學會そのものに就いて申し述べましても、頗る非學術的で、大部分は夫人、令嬢同伴の出席者で占められ、従つて云はば一ツの懇親會の如きものであります。詳しい學會の報告は日本外科學會雜誌に

も載せて置きました通りで、この會に出る事は何も名譽でもなんでも無いので有ります。私にはどうも此會に國家の金を費して代表を送り出さねばならぬ程のものではない様に思はれました。

そして、此の際の演説、議事等は後に印刷になるのでありますから、その「パンフレット」を讀めばよい譯で、此の方が遙に有意義の様にも思はれます。

只此の學會で目につきました事は會員諸君が會長選舉と云ふ事よりも、次回の宿題を選ぶ事に甚だ熱心であつた點でありました。つまり自國で一番進んで居る研究を宿題に挙げ様とするのであります。それは 第1. 脊椎管内腫瘍の診断及び治療 第2. 非結核性肺膿瘍 第3. 食道の外科。以上の三ツであります。後に至り「外科的麻醉法の最近の進歩」といふのが第4の宿題として追加になりました(1930年1月2日)。

このうち第3の食道の外科に關しましては1925年以來教室で平壓開胸術を行ひ、又近來平壓開腹開胸術を行ひまして、食道への新しい到達路を開拓致して居りますので、此の問題に關しましては多少とも、物を云へる材料を持つて居りますから、先づ私は此の題にも投票致したので有ります。而も幸ひにそれが採擇されましたのですが、次回の學會へは是非京大の外科からも人を送りたいと思つて居る次第であります。

その他に「外科に於ける『ワクチン』」と云ふ題もあつたので私はそれへも投票致して置きましたが、此の題は不幸採擇にはなりません。歐洲では最近外科方面からも「ワクチン」問題が云々される事が盛んでありまして、今回の Hartmann の會長演説のうちにも「ワクチン」及び「アナトキシン」に迄言及致して居たのであります。

國際外科學會なるもの大體の概念は以上で盡きて居ると云つてもよいのであります。

公用はこれで済みましたので、私は直ちに瑞西のベルンに参りました。私の今度の用事と申しますと、喰菌現象「イムペヂン」作用に關する教室の業績を世界的に發表するにあつたのであります。尙ほベルンは、私が1912年に渡歐致した時に1917年秋まで滞留した土地でありまして、此の地は私の先生の故伊藤名譽教授が Kocher 先生の下で勉強された所であります。それ故に私も自然と此の地に引きつけられた譯でありましたが、此處の大學に参りますと、先輩諸氏の色々の逸話を聞き得るのであります。たとへば伊藤先生は、頗る勉強に熱心で、實驗用の家兎等も自ら下宿へ持ち歸つて飼ふて居られたとか、アーレ河で釣つた魚を自ら「フライ」にして食べて居られたとかの類でありまして、これと云ふのもあちらの大學には住込みの夫婦者の小使が居りまして、代々永住して居るのでありますから、その間に出入した人々の逸話は随分と詳細に聞く事が出来るのであります。此の住込み小使ひ制度は仲々良いと思ひまして、現に私共の教室でもその制度を採つて居る様な次第であります。

話は他に外れましたが、そこで10月1日から著書の第1頁の原稿を書き始め、本年の正月半ば迄に、一と先づ原稿の下書きは終つたのであります。次いで2月初めから、それを「タイプライティング」する爲に伯林に出て参つた譯で、6月中頃には大體片附いたのであります。此の書の出版はグスタフ・フィツシヤが引き受けまして、4ヶ月以内に出版すると云ふ話が決りました。

校正等は3人掛で夜半に至る迄從事致したのでありますが、伯林を出發する2日前に辛うじて製本済みの2冊を手に入れ、1冊はすぐ伊藤先生の靈前に捧げる爲に鳥取へ發送しあとの1冊だけ持つて歸つた様な譯であります。

ベルンで原稿を書いて居りましたうちに、私にとつては忘れ難い一つの想出があります。11月半ばの或る寒い夜、私がいつもの様に机に向つて「ペン」を走らせて居りますと丁度裏庭の窓の下から、大地から勢強く湧き出る様な合唱が響いて参りました。宿の娘も登つて来て、それと注意をして呉れましたので、窓を排して首を出して見ますと、後庭に續く隣家の花園の中に男女30人ばかりが、てんでに蠟燭を持つて合唱して居るのでした。丁度アーレ河から立ち昇つて来るさ霧に包まれて、街燈の灯と蠟燭の灯は夢の様に霞んで、近くや遠くにある縦の樹や建物等が墨繪の様に現はれて何とも云へ無い「ロマンチック」な光景でありましたが、外はもうかなり寒いにも拘らず人々は熱心に各種の合唱をして居ります。合唱の文句ははつきりと理解する事は出来ません。處が只一ヶ所、次の文句だけは、はつきりとのみ込めたのであります。

“Das Feuer brennt so sehr,
Die Liebe brennt noch mehr.
Das Feuer kann man löschen,
Die Liebe kann man nicht vergessen.”

此を聞いた時私は妙な感慨に打たれたのでした。と申しますのは私が大學を卒業しました時、卒業「クラス」會が祇園の中村樓にありまして、その時例によつて滿を引き痛飲され東京既に熟して居る、故伊藤名譽教授が中腰で身振りをされながら、此の詩句を口誦まれて私にこれを譯して持つて來いとのお話でした。その時私は「かしこまりました。」と御答へ致して、譯は即座に腹稿で出来ましたが、その後十數星霜遂にその譯文を御目につけない前に先生は御亡くなりになつた様なことで御座居ますが、これを想ひ出して急に沈んだ氣持ちになり、私は窓を閉めて再び先生の寫眞に對して机に向つたのであります。而も此の合唱は亡き人を悼んでの合唱だつたのであります。何時か、どなたかが、此のベルンの地に行かれることがありましたならば、恐くあの建物は永久に残つて居るで有りませうから、その家の三階の角の部屋で鳥瀉が著述に耽りながら此の様な感慨に打たれてあつた事

を偲んでいただけたならば幸だと思ふので有ります。其の家はベルン大學天文臺の後方で Gesellschaftsstrasse 12 番地であります。

これがその著書でありまして Die Impedimentscheinung と題して置きました。

私は此の著述の中で喰菌現象を指標となして、種々の「イムペヂン」現象を検討致しまして、就中「イムペヂン」を産出する生物の限界を決定し、又悪性腫瘍に於ける「イムペヂン」現象と云ふ、全く新しい腫瘍の生物學的事實を立證する事が出来まして、たとへば家鶏粘液肉腫、人間紡錘形細胞肉腫、又フレキシネル系白鼠癌腫等の發生原因は微生物體であるべき事を提唱致して置いたのであります。

話が自分の事にもみ渡つて甚だ恐縮ですが、校正の仕事も片附いて参りましてからは、その餘暇を利用して所々の大學や病院を觀て歩きました。

私は好んでハイデルベルヒの Enderlen 教授の許に参りましたが、同教授は今年72歳位で實に穩かな落ちついた人であります。私はこの前(1927-8年)に獨逸に参りました時出掛けて行つたので、もう先方でも私を見知つていきなり握手の手を出す程でありました。可成りの年輩でありながら、少しも手術中の手先きは震はないので有ります。一體獨逸の大學教授には老人の人が多く、而も皆熱心に勉強致して居りまして日本の様に誰も彼も一律に60歳で停年と稱して教授の職を退いて貰ふ様な事は如何かと私は考へて居るのであります。

ビーア教授は人格者としても仲々評判の良い人で、先年來彼が唱へて居る鐵灼熱療法を行ふた患者を色々澤山に見せて貰ひました。その方法は灼熱した鐵の棒で創面を焼き、其の後創面を正確に合せて置くのであります。此れによつて彼の所謂 Praktisch primär に創傷は癒ると言ふのであります。そして同教授は「自分の方法を同國人で追試して呉れるものは少ない」と云つて嘆いて灸治療の發達した日本の外科醫の方が却て自分の療法に向つて同情があると思ふと申されて居りましたので、私は拙著の最後の頁に於て言を此の點に迄及ぼしビーア教授の方法に依れば創傷の肉芽面に存在する「イムペヂン」が破却されて、喰菌現象も旺盛となり、化膿創も容易に治癒するものであると解釋附加して置きました何處の國でも自國人の創見等は追試するものが少いもので、これは獨逸だけに限つたことではありません。獨逸よりももつとひどい國もあります。

其他伯林にはエンダーレン門下のマイエルや腦外科を標唱して居るハイマン等が居ります。ハイマンは今、修業時代の人で、従つて隨分患者の死亡率も多い様であります。それでも患者はどしどし集つて参ります。こゝ2-3年で大家になる人でありませう。此の點日本と可成りに異つて居ると思ひます。日本なれば、よし1人や2人の死亡者があつても相變らず患者を送つてこれと思ふ外科醫を大成させ様と各方面から仕向ける様のことは先

づ無いかの様に考へます。

4月には獨逸外科學會がありましたので、私はそれにも出席して4日間毎日傍聴しました。此の學會に出席するには豫め (Gastkarte を求めて置く必要がありまして、學會開催中は門番の様な者が入口に居つて、此の「カルテ」を調べて入場を許可するのであります。さうして、野次半分の傍聴人を整理致して居ります。これ故に演説中に出たり入つたりして會場を亂す事は全然ありませんで、7-800名の會合でも誠に靜肅なもので有りました。これは日本でも眞似て良いと思ひます。會衆の多數なのを一ツの誇りとせんが爲に野次馬を澤山入場させねばならぬことはありますまい。

會場は Charité 病院前の Langenbeck-Virchow-Haus でありました。ここは平素はシーメンス會社の器械を陳列して居りまして、一切の器械の説明をして呉れます。又醫師會の圖書室もありまして、醫師であれば誰でも行つて自由に取出して讀める仕組になつて居ります。京都、或は東京等でも島津、或は風雲堂あたりが、この様な建物を造つて呉れたらどんなものであらう等と思つたりした事でありました。

會場は観段式の階段席から成つて居て、日本に於ける様に圖、表等でごたごたする事は一つも無く、眞中に据えてある「エビチアスコープ」及び「ディアボチーフ」の便を以て濟まし、實に気持ちよく運んで居ります。

一體日本で、現今の様な大きい表や圖を持ち出す様になりましたのは、その昔、私が河村博士達と共力して、「自分の云ふ事は耳から入れるばかりでなく、目からも注入して印象を強めなければならない。」と主張してやり出してからの様に思はれます。正面の壁の上下左右にはカイゼル始めランゲンベック、ビルロート、フオルクマン等知名の外科醫の肖像が懸けてあります。日本の現状と比較して美まらずには居られません。

會場で目に付きました事は女將や軍醫の居ない事でした。然し左の頬に決闘「メンズール」の傷を持つた人が多いのは目に付きました。即ち此の傷のある人は Akademiker たるの證據でして、大學的最高學府の教養のある立派な紳士たる事を物語つて居るものであります。之に反し人間に何等の信頼すべき目標もなくまた徳義上の制裁も無い國では百鬼夜行になるのは當り前です。それですから獨逸では「メンズール」の傷を持つて居る人になれば一面識なくても信頼して物を尋ねる事が出来、信頼して物を託する事も出来るのであります。今日でも婦女子が其の様な人との婚約を歓迎するのは當り前であります。故伊藤名譽教授が曾て「學術人物共に信頼すべき外科醫が一つの團體を作り、やたらな者はそれに加入させぬ事にしたらばよからう」と言はれたことがありました。

會長はキールのアンシュツツでありましたが、彼の座長振りは頗る輕妙で、又會期の4日間一瞬も其の席を離れませんでした。これは日本に於ても我々が率先してその範を作つ

たものでありまして、私は會長たる者はたとへば排尿の必要を感じる場合たりとも席を立つべきでは無く、終始その會を處理す可きであると、信じて居るものであります。獨逸外科學會に於て偶然にも同様の會長振りを見て「是ある哉」と心私かに喜んだ次第でありました。

第1日に問題になりましたのは「アヴェルチン」麻醉でありました。1928年に私が獨逸に参りました時には「アヴェルチン」麻醉が盛んに行はれて居りまして、而も全部直腸麻醉でありました爲に、その粘膜が犯されて不快な副作用を呈して居りました。處がキルシユネルがこれを靜脈内にやる事を始めまして、それを報告致したのであります。

此時會長アンシユツツがそれに対して先づ最初の討論をやりました。即ち「靜脈内注射を行ふのはよいが、餘計やり過ぎた時に困るだろう。直腸麻醉であれば過ぎたと思へば洗滌して其の調節を行ひ得る。」と云ふのでした。すると彼はこれに対して次の様に答へました。「以上の事は直腸麻醉にでも同様に言はれる事であつて直腸麻醉でも過ぎたと思つた時は既に血管内に吸収されて居る時であるから、どうにも出来ないのである。」そして靜脈内には一定の小分量宛々を徐々に注射して行くものである事を付け加へて居ました。然し大多數は靜脈内注射には反對の模様でありました。その日の午後、向ひの Charité 病院で患者の供覧が有りました。私も見に参りましたが、患者は一つ、二つと聲を出して大方 17 を數へる頃には完全に麻醉に入つて終ひました。その際淋巴腺の剔出術を行ひ、20 分もして、又次の患者の手術に取り掛る頃には、前の方は全く麻醉から醒めて歩いて來る有様でした。患者に聞いてみると苦痛は何も無いと云ふ事で、外來用として或は適して居る様にも思はれます。然し此の際も討論が入りまして、「靜脈内に注射し様として色々準備をする事は、是から麻醉をかけるんだぞ、と云ふ不安を與へるもので餘り讚めた事では無い」と云ふのです。

「アヴェルチン」麻醉では御承知の様に、我々が麻醉に向つて要求する筋肉の Rigidität を除去する譯に参りませんが、獨逸が何故にこの麻醉に向つて數年來其の研究を持続追及して行くのかは、一寸解釋に苦しむのであります。或は自分達が「アヴェルチン」を造つたからでありませうか。又、從來からの麻醉と云ふものに不足を感じて居るからでありませうか。

然しこれも文化が進み過ぎた結果疼痛への感受性が非常に發達して、何んとかしてほんやりした氣分のうちに手術を濟ませ度いと云ふ彼等の一つの もがき では無いかとも觀られるのであります。その他「ペルノクトン」麻醉等も研究されて居ます。

此の日は更に Stich の宿題報告「出血」が有りましたが奇異に思ひましたのは、その療法のうちで輸血に關して話が無かつた事で有ります。此の宿題報告に對して一つの追加が

ありました。それは頸部の腫瘍を電氣滲水器で除去した例を擧げて居りました。其の時會長のアンシュツツは直ちに「今の追加は宿題と關係が無いでは無いか」と注意致しましたら其の人は「滲水器を以て」と答へて平氣なものでありました。會場は笑ひで満たされましたが、何か一寸した事に關聯をつけて自家例を持ち出さうとする所はなかなか面白いものであります。此日の印象で私にはキルシュネルが一番氣に入りました。彼は後年必ず大立物になるものと思はれました。

第1日の晩には7時から11時頃迄「レントゲン」や手術操作の活動寫眞のみが秩序よく映されて、誠に整然たるものがありました。此等は日本の學會で眞似しても良いものだと思います。

2日「」にも一つの事件がありました。マグヌスが Varix を除去した方が良いと言ふのに對してフィツシヤアは除かずに保存的療法を行つた方が良いといふので、演壇の上からと座席の下からと掛け合ひで色々議論を闘はして居りました。が、此の時會長アンシュツツが „Magnus hat Recht“ とあつさり言つて退けましたので討論は終つたので有ります。會長の此の言に對してフィツシヤアは何とも思つて居ないもの様で又、マグヌスにしても「それみたか」と云ふ感じも無く、兩方ながら誠にさつぱり致して居ります。

相當の大家連で而も此の通りであります。此が日本の學會で起つた事件だと致しましたら如何で有りませうか、思ひ半に過ぎるものがありませう。日本の大家諸君はもつともつとあつさりする稽古をせねばなるまいかと考へます。此日會長アンシュツツは昨日は皆んなでキルシュネルを攻撃し過ぎた様に思はれたがそれは悪るかつたと、述べました。此様に直情徑行で實にあつさりして居ります。

又此の日胃潰瘍を除去す可きか否かの問題も盛んに討論されまして、大體の意見としましては除去しない方が良いと云ふ方に落ち附いた様でありました。然し Kappis や Starlinger 等は「ウルクス」は凡て除去した方が良いと言ふことを力説して居りました。それで、會長のアンシュツツは此の際も如何に云つたかと申しますと、曰く「『ウルクス』取るべし。大いに取るべし。Aber sehr sehr sehr vorsichtig」これで討論は終結となつたのであります。

又幾日目であつたか、はつきり致しませぬが、フェルステルの手術文では疼痛感に變化の無い事があるから、Hinterhorn を切斷するともつと効果が多いと云ふ事を發表した人がありました。其の手術々式等に關しましては何等報告する所がありませんでしたが、近日中に雑誌に發表になる事と思はれます。此の演説に對して會長アンシュツツは謙辭を述べて居りました。

Coenen が胃全摘出術なる題の下に、その方法を述べて居りましたが、之は大したもの

ではなく我々の教室でやつた平壓開胸開腹術に依る胃全別出術の方が遙に優つて居ると思ひます。ドイツ人のやる事だから何もかも良いと云ふ事は無いのであります。

2日目だつたかに又一つの事件がありました。ある演説の最中に、前列に居並んで居た老大家連の間に小さな紙片が盛んに往來して居たかと思ふとアンシュツツが立つて、「諸君は今此處で一枚の紙片があちこちと手渡しされて居るのを不思議に思はれるであります。之れはある新聞が獨逸外科學會を寫眞を以て侮辱 (beleidigen) したもので、之れに對して如何に處分したらいいか諸君の意見を聞きたいのである」と云つて、その新聞を「エピヂアスコープ」にかけて映して見せました。みますと手術臺を圍んで居る著名の老大家連の似顔畫がありまして、その後ろに死神が鎌を持つて立つて居る繪なのであります。會長は『會員中で誰かこんな寫眞を撒らせた者があるか』と尋ねて大分立腹の態でありましたが遂にビーア教授が起立して「これは小新聞の仕事に過ぎないから不問にして置いたらいいだらう」といふのでその儘になりましたが、此れ等は一方より云へばこせこせし過ぎるとも云へますが又かかる一小鎖事をも忽にしない獨逸流が窺はれるのであります。

又或る人が立つて「ヒペルアチデタイト」(Hyperacidität) に Vagus を切斷したと云ふ報告をしてかかる手術は獨逸にはまだ知られて居らぬと申しますと、他の一人が又立つて「自分は同じ手術を既に 700 人に向つてやつた。しかし其の效果に就いては dunkle Zukunft」だと繰り返し繰り返し言ひ譯の様に申しましたので、聽衆は大笑ひでした。

即ち獨逸外科醫の中にも患者を説きつけて効果不明な手術を只無暗に行ふ者があるものと見へます。

獨逸の外科學會も徹頭徹尾眞面目臭つて居る譯ではありませんで、時には此の様な御愛嬌的な話も飛び出すのです。或る人は演壇に上つて演説中に「自分の息子は今大學で勉強して居るが、それが卒業したら此の問題に就いて更に大に言はせる」と云つて聽衆を笑はせたりして居りました。獨逸の學會では會衆の耳が肥ゑて居りますから、『しちくどい愚なことを述べて居るな』と私共が心中に思つて居りますと會衆も亦た同感だと見へて足をばたばたさせ床を叩いて演説を中止させます。會長が進んで中止させるのを待つて居りません。それですから會長も樂です。不當に會衆が「足づり」を始めた様な場合は會長はそれを中止させます。或人が原稿の朗讀演説を始めましたら會衆の「足づり」でいきなり中止されました。此の様に會衆から演者に加へる制裁がなかなかきびきびして居ります。

學會最後の日にはザリエルブルツフが結核に對する無食鹽食療法の話をしました。これに依れば皮膚結核はよく癒る様に思はれます。私は大連の近森、奉天の平山兩教授と共に其の調理場に出掛けて實際に無食鹽食なるものを味ふてみました。仲々味の良いもので、新鮮な果物をも澤山添へて居りました。これに日光療法や大氣療法を加味して居る所もあり

まして、又結核患者は四季を通じて暖房も何も無い「バルコニー」に寝かしたまま外氣を吸はせて居るのであります。

この無食鹽食療法は實際はサヴェルブルツフの助教授の Hermannsdoerfer のやつた仕事でザ氏は席上でも「新聞雜誌等では私の効を盛んに讃へて居りますが事實はへ氏のやつたもので、私は恐縮して居る」等と云つて居りました。ザ氏は其の席上で「私はP₁₁と云ふ事は何の事だか知らないのです」等と平氣で云ふのであります。此の様な際には聴衆は無無論どつと一度に笑ひます。

へ氏はその夫人と共にこの研究に従事して、可成りの年月を過して居ります。一つの主題に夫婦で全力を擧げて突き進んで行く所は、流石にドイツ人詳しく曰へば獨逸系の猶太人だと思ひます。

日本人は他人それも外國人の完成したものを始めて自家用にするといふやり方が多くて云はば「サナダ」蟲の生活であると云へるであります。

學會最後の日には會長が挨拶し其の中に『演題が 60. 討論追加が 200. 問題は凡て精選されたものばかりで實に獨逸外科の立派な觀兵式 (Parade) である云々』と述べて居りました。私も心中それは決して誇大の言では無いと感じました。最後にバーセルのヘンシエンが起つて會長に對する謝辭を述べ會衆は其の萬歳を三唱し相互に握手し “auf Wiedersehen!” を言ひ交して靜かに退散しました。私は最後の最後まで見届けるつもりで更に其の光景を見て居りましたがウキーンから來た若手のスターリンゲル Starlinger が老大家からしきりと握手され言葉を交され面目を施して居りました。それでアンシユツツ Anschutz も ボルハルド Borchard も其他の人々も退場しましたので、私は空虛になつた會場に感慨の深い別れを告げて歸りました。

或時ザ教授の臨床を見に參りました時丁度伊太利の醫師團が 4-50 人やつて來て、ザ氏はその人達を前にしながら、例の Thorakoplastik を行つた患者や、無食鹽食療法を行つた患者を出して色々説明した擧句「無食鹽食療法は肺結核には利かない様である。だから肺結核に對しては Thorakoplastik を行ふのだ。」と言つて居りました。これなどは自ら矛と盾とを同時に賣つて居る様なものであります。じつと聽いて居ると一寸可笑しくなります。

一體ザ教授の Thorakoplastik なる手術は決して Plastik で無く、その癒つたと云ふものは皆胸郭、體形に醜惡な變形を來して居ります。むしろ Thoraxzerstörung と言ふのが妥當であらうと思ひます。これは御承知の通り結核肺を廢用に歸せしめるのであつて Restitutio ad integrum を理想とする治療本來の主旨に叶つて居らぬものであります。結核肺を萎縮させて廢用に歸せしむる事は結核腎、結核腸、結核關節等を切り取つたりなどするのと同じでそれが『治癒』だとは申されません。此の點から云へば今後どの様にな

るかは不明であります、大澤助教授が最近肺結核治療の爲に胸部交感神経節を除去したのは治療の目的が積極的で誠に合理的であると考へます。併しこれは十分批評的に進んで行かねばなりません。また平壓開胸術が出来ますから胸廓を開き結核肺を露出し胸膜を清拭し丁度腹膜結核に對する外科手術と同様に處理して治療を企てることも試みて然るべきものと考へます。これは同一患者に二度でも三度でも行つてよいと考へます。

その他で目につきました事はドイツでは「リバノール」を使つて居ない事です。使用して居るのは昇汞が多くて「リバノール」などはドイツが國外に出すための製品かも知れません。

又、胃腸吻合は Vordere Anastomose を盛んにやつて居りますが、之れは Hacker の方法は Mesocolon を突いたり其の跡始末をしたりするのに時間がかかるからであります。

此の胃腸吻合の際 Hacker 氏法を行ふ時に、若し胃切除部が大きかつたり、又胃が萎縮したりして居る時には Mesocolon の Schlitz を如何にして閉鎖するかが私等の年來の問題の一つでありますので、私はこの點を Frankfurt a. M. 外科を訪問した際に Fischer にたづねて見ましたが、彼は判然とした返事を與へて呉れませんでした。即ち未だ此の點を考へて居ないので、これは今後の研究に待つべきだろうと思ひます。

エンダーレン Enderlen 門下は「ゴム」の手袋を用ゐて居りません。

ドイツの學生は餘り勉強しない様です——日本の學生の方が遙に勉強し、よく物を知つて居ります。——彼等は各大學を渡り歩くに當つては、冬なれば「ウインター、スポーツ」の出来さうな土地にある大學と云ふ様にして選みますのですが、學生時代に好成绩を目的に夤勉強する人をば Streber と稱して流し目に見る様です。しかし一度卒業しますと、實によく着々と、どつしりと勉強して參る様です。この點は日本の醫學生と異なる様で、又、醫者になれば所謂喰ひはぐれが無しに何とかなるだろうと云ふ様な考へで醫學を勉強するのは少く、醫學をやり文學を、哲學をやると云ふ人が多いのでありまして、之も日本と異つて居る様であります。

私は10月26日にベルリンを出發してシベリアを一路日本へ歸つて參りましたが、汽車の乗換えを利用してモスコウに下車し7時間許り居り病院も一ヶ所觀ました。

モスコウは今物質に缺乏して居る様で、日本の大使館員の夫人が洗濯石鹼が手に入らないで困ると云つて居られたので私のものを差し上げたのですが、大使館員が之ですから、況んや一般の人々は困つて居るだろうと思ひます。汽車の中でロシアの軍人に會ひこれに對する意見を聞きますと「もう5年たてば樂になる」と云ふ返事でした。つまり石鹼や帽子や靴や、羅紗などを製造する機械を目下買つて居るのだそうです。汽車の食糧は勿論缺乏して居たのですが、私共はベルリンを出發する時、10日分の糧食を背囊につめて參りま

したので糧食を持参しなかつた日本人の同乗者にも多少分けて上げることが出来ました
附記

以上は鳥瀉教授が昭和5年11月8日御歸學以來、京都醫學會、雜誌抄讀會、及び研究室員歡迎會等の席上で御講演及び座談的に話された事項を一括的に憶記抄録したものであつて、文責は總て憶記者が負ふものである。

○ 雜誌抄讀會演題

11月27日(木)午後6時半 於 樂友會館講堂

- | | | | | |
|-----|---------------------------------------|---|---|---|
| 1. | 平板縫合ノ一新法 | 庄 | 山 | 君 |
| 2. | 「サリチル酸ナトリウム」ニヨル靜脈硬化の注射 | 長 | 岡 | 君 |
| 3. | 豫防的光線療法 | 富 | 永 | 君 |
| 4. | 創傷「ショック」ニ關スル研究 | 青 | 木 | 君 |
| 5. | 獨立性臨床の形態ノS字狀結腸巨大症、ソノ發生、
徴候及ビ治療ニ就イテ | 池 | 田 | 君 |
| 6. | ビツキン氏ノ可調節性脊髄麻醉經驗 | 小 | 津 | 君 |
| 7. | 輸血、食鹽注入、失血時ニ於ケル腹腔内血液殘留 | 林 | | 君 |
| 8. | 脊柱ノ砂時計腫瘍ノ診斷並ニソノ發生ニ就イテ | 根 | 本 | 君 |
| 9. | レーン氏骨縫合法ハ變棄スベキカ | 角 | 田 | 君 |
| 10. | 酸性及ビ「アルカリ」性榮養ノ骨再生ニ及ボス影響ニ就イテ | 三 | 村 | 君 |

洋行座談

鳥瀉教授

香川縣外科集談會ノ成立

昭和5年5月丸龜市開業ノ醫學博士吉田美壽利氏本會ノ設立ヲ發起シ此レヲ日本赤十字社香川支部病院副院長醫學博士村上謙次郎氏ニ諮リテ賛成ヲ得尙鶴身藤太、小西棟平、福家傳、石本佐吉、岡本繁、東原昌英ノ6氏ヲ語ラヒテ發起人トナシ香川縣下在住ノ外科醫ヲ勧誘シ遂ニ24名ノ會員ヲ得テ7月6日本會第1回發會式ヲ高松市讃岐會館ニ開催ス。

當日決定事項左ノ如シ

(1) 會則ノ決定

第1條 本會ハ香川縣下在住ノ外科醫師ノ親睦及學識向上ヲ圖ルヲ以ツテ目的トナス。

第2條 本會ハ香川縣外科集談會ト稱ス。

第3條 會員タルベキ者ハ本縣下在住ノ醫師ニシテ本會ノ目的ニ賛同スルモノトス。

第4條 本會ヘ入退會セントスルモノハ現住所姓名ヲ記シテ本會々長ニ届出ス可シ。

第5條 本會ハ會長1名常任幹事1名幹事若干名ヲ置ク。

第6條 會長ハ集會ニ於テ會員中ヨリ會員之レヲ五選シ常任幹事及幹事ハ會長之レヲ囑託ス。其任期ハ會長常任幹事各2ケ年幹事ハ半ケ年トス但シ重任ヲ妨ゲズ。

第7條 本會々員ハ會費トシテ毎年金3圓ヲ納附スルモノトス。

第8條 集會ハ毎年春秋2回トシ開會地ハ其都度之レヲ定ム。

第9條 集會ハ主トシテ座談的會合トシ奮ツテ出演スルコト。

第10條 本規則中修正若シクバ改正ノ要アルトキハ集會ニ於テ是レヲ決定ス。

(2) 會則ニ依ル役員選舉

(イ) 會長 村上謙次郎氏

(ロ) 常任幹事 東原昌英氏

(ハ) 幹事 石本佐吉氏、浮田勝造氏

當日次回開會地ハ多數決ニ依リ高松市ト定マリ出席者一同紀念撮影後簡單ナルタ餐ヲ共ニシ歡談裡ニ午後7時散會セリ。

當日會員24名中出席者19名ナリキ。會員ハ下ノ如シ。

香川縣外科集談會々員住所氏名錄

(イロハ順)

仲多度郡琴平町	岩崎 謙介
高松市二番町	石本 佐吉
大川郡長尾町	大石 徳一
高松市赤十字社支部病院外科	大島 松一
高松市一番町	大森 吉五郎
丸龜市中央病院外科	岡本 繁
丸龜市通町 166	吉田 美壽利
高松市古新町紀念病院外科	田中 達
高松市福田町	武下 吉次
木田郡辨禮村	鶴身 藤太
丸龜市西平山町 1245	鍋島 三藏
高松市赤十字社支部病院外科	村上 徳太郎
高松市天神前 141	村上 謙次郎
高松市百間町 9	浮田 勝造
高松市高松病院外科	松浦 俊久
高松市赤十字社支部病院外科	前田 道忠

香川郡鷺田村	前	田	幹	照
綾歌郡陶村	福	家		傳
三豊郡觀音寺町	小	西	棟	平
仲多度郡善通寺町本郷通	古	本	志	朗
高松市西新通町 34	朝	倉	大	吉
小豆郡草壁町	秋	田	義	彰
大川郡引田町 2270	柳	原	省	吾
高松市赤十字社支部病院外科	東	原	昌	英
昭和5年12月調(24名)				

第一回香川縣外科集談會記事

會則第8條ニ依リ昭和5年11月9日午後2時50分、高松市古新町讚岐會館ニ於テ秋期外科集談會ヲ開催ス。

決議事項

- (1) 次回開會地、丸龜市
- (2) 次會幹事、鍋島三藏氏、吉田美壽利氏、岡本繁氏
- (3) 吉田美壽利氏ノ發意ニ依リ會員ノ慶弔ニ際シ本會ヨリ其ノ意ヲ表スルコトニ決ス。

當日講演者氏名及講演概要

- (1) 興味アル手術例ト題シ蟲様突起摘出手術ニ際シ腸管竝頓及腹腔内潜在睪丸ニ遭遇セル話ヲナス。
岩 崎 謙 介 君

- (2) バセドウ氏病治驗3例ニ就イテ

大 島 松 一 君

本疾患ニ際シ甲状腺摘出後レントゲン放射ヲ行ヒテ得シ治驗例3ツヲ示ス。

- (3) 三叉神經痛ニ際シ卵圓孔内酒精注射療法ニ就イテ

村 上 德 太 郎 君

該注射療法ニ依ル治驗例3ツヲ示シ本法ノ有効ナルコトヲ説ク此レニ對シ本法施行後兩眼ヲ約1週間被蓋スルトノ報告アルガ如何トノ質問出ズ(田中達氏)又獨乙ノビール氏「クリニツク」ニ於テマルチン教授ガ本疾患ニ對シ2%「ボカイン」注射ヲ行ツテ居タガ思フ様ナ効果ガ無カツタ様デアツタトノ追加有リ(吉田美壽利氏)

- (4) 臨床上ニ於ケル2-3ノ失敗談

浮 田 勝 造 君

開業醫ガ頭部癩痕整形手術＝際シ期待通りノ整形的ノ結果ガ生ジナカツタ場合即失敗
＝歸シタルガ如キ場合ハ實＝實地家トシテ非常＝不面目ヲ蒙ル。又自分ハ今日迄多數
ノ刺鍼患者ヲ取扱ツテ來タガ極ク少數例＝於テ摘出失敗＝歸シタ事ガアツタガ此等モ
開業醫トシテ大イ＝名聲ヲ失墜スル事件デ吾々ノ注意スベキ事也ト説ク。

(5) 穿孔性腹膜炎ト誤診セル子宮外妊娠＝就イテ

松 浦 俊 久 君

第一印象＝於テ穿孔性腹膜炎ト決定シテ開腹手術ヲ行ヒシ＝子宮外妊娠破裂＝遭遇セシ
症例ヲ詳述シ診療＝際シテハ解リ切ツタ事デハアルガ綜合的檢索及詳細ナル豫診ヲ要スル
ト説ク此レ＝對シ吾等實地家ハ同様ナル失敗例多々有リト追加有リタリ。(岩崎謹介氏、秋
田義彰氏、村上謙次郎氏、田中達氏)

(6) 開腹術ヲ施行セル臍臟壞死ノ3例＝就イテ

前 田 道 忠 君

本病ノ開腹手術セル3例ヲ詳述シ文獻例ハ何レモ白血球增多就中多形核白血球增多症ヲ
來セルガ此等3例中1例ハ白血球減少及多形核白血球增多ヲ示シ前者＝於テハ文獻例ト相
反シテ居ルハ大イ＝興味アル現象ナリト述べ本疾患＝際シテハ出來得ル限り早期＝開腹手
術スベキモノナリト結論ヲナス。

(7) 腹腔臟器内＝於ケル嚥下異物

・ 東 原 昌 英 君

約12糎ノ綿棒ガ嚥下＝依リ十二指腸内＝介在セルヲ開腹手術＝依リ摘出治療セル例症ヲ
詳述ス。此レ＝對シ魚骨、西瓜ノ實等ガ肛門内＝大ナル腫物トナリテ介在セル例症(岩崎
謹介氏)魚骨ノミヨリナル栗刺狀ノ肛門内異物例(秋田義彰氏、福家傳氏)ノ追加有リタ
リ。

惟フ＝香川縣外科集談會ハ全縣下ノ有力ナル外科醫ヲ網羅シ、會員諸氏ノ熱心ト眞摯ナ
ル態度＝ヨリ其目的＝向ツテ一致協力精進シツ、アル状態ナリ。(常任幹事東原昌英氏記)

吾々ハ香川縣外科集談會ノ成立ヲ祝シ、近畿外科集談會(現在ハ近畿外科學會)創設當時
ヲ顧ミ、此ノ學會モ亦年々歳々堅實ナル發達ヲ遂ゲテ行クコトヲ確信シマス。

藤浪博士還曆記念事業方法きまる

過般還曆ニ達セラレ閑地ニ就カレタル病理學教授藤浪鑑博士ノ還曆記念事業ハ左記ノ方法ニヨルコトニナツタ。

- ▲有志ヨリ三圓宛ノ餘金ヲ募集但受附ハ本年三月末迄
- ▲博士ノ肖像二面ヲ製シ一ハ博士、一ハ醫學部ニ寄贈
- ▲博士ニ記念品ヲ贈呈(選擇ハ實行委員ニ一任)